

特選

● 伊藤 一彦 選

0コンマ1秒の差が風になり走る選手の背を追い上げる
しあわせに暮らしたときとさときとさを幼い肩にいつぱいまぶす
えごの実でお手玉作った子どもです駅舎の庭に青き実ゆれる

東京 森田小夜子
静岡 加藤 京子
愛知 伊藤 絃美

● 大島 史洋 選

綱かけて国来^{くにこ}国来と引きよせる風土記のやうにはゆかぬ島島
燃費よく故障少なき小型車のようなる夫が畑に出でゆく
病める娘が危険防止にくくられる両手をそっとゆるめて帰る

三重 原 真里子
岐阜 松原 敏子
兵庫 立田由里子

● 岡井 隆 選

一票を持ちて行かむかこの国の明日に少し風入れるため
ひと匙のオリーブオイル零しをりうす紫のやさしき嘘に
さみしい顔しないさみしさむらさきに暮れる世界の向こうから来る

岡山 平尾三枝子
千葉 渡辺真佐子
東京 柳沢 幹夫

● 小池 光 選

風となりし斎藤史がからからと笑ふこゑして信州は晴れ
壁に貼る不動明王にキスできるまで背を伸ばす けふのリハビリ
夏暮れて西フランスの港町入り江は引き潮舟傾きぬ

静岡 野島 光世
徳島 橋本 妙子
フランス 重光 紀子

● 小島 なお 選

青葉風ぬけゆく居間に椅子ひとつ訪問カットの美容師を待つ
生きてるか生きてはいるよ質がなあと農夫らの会話大根のことらし
残雪の鳥海山を見つつゆく犬の巻尾が朝陽に光る

神奈川 おのめぐみ
青森 栗谷川佑子
秋田 百木ケイ子

● 三枝 昂之 選

甘やかで切ない風もあることを人工知能は知るのだろうか

「よしよし」と指差励行の運転士によく似合うなり若葉通りは

爪先でラップの切り口さがしつつ仲直りする糸口さがす

神奈川 おのめぐみ

東京 佐藤あさ子

神奈川 川崎 由美

● 佐伯 裕子 選

風に顔上げては屈み田草取る峽の夕日を使ひ切るまで

決算書も名簿も飲み込むシュレッダーいいことだって少しはあった

きみがゐるただそれだけで吾がめぐりひねもす明るきひととなりぬ

長崎 小泉 浪士

埼玉 斎藤 長光

埼玉 針ヶ谷乃里子

● 坂井 修一 選

ふつふつとちいさな泡となり風はフランスパンの内側で吹く

駅中の阿闍梨餅食むひとり旅ストレイシーブ年老いてなお

「軍手」とふ名の未だあり草を抜く戦ひの無き日日願ひつつ

愛知 漕戸 もり

千葉 安部 時子

徳島 廣瀬 艶子

● 佐佐木幸綱 選

夕暮れのカリブの風のぬける浜ふたつ言語で進む婚あり

ぶつかりておしのけもして白鳥はおりたいところにおりておちつく

日に二千ダンブ行き交いリニア来る大鹿村は小鳥啼く谷

アメリカ 西岡 徳江

千葉 宮尾 清美

長野 北原 隆司

● 篠 弘 選

水玉の似合ふ子がをり図書館の風通ふ場所で〈こんぎつね〉読む

マチス描く赤きいのちのたまゆらの「金魚」は泳ぎ人らダンスす

我が街の最後の本屋日焼けした子供集めて朗読会す

兵庫 大西知永子

千葉 並河千恵子

東京 吹上 美恵



● 俵 万智 選

目のくぼみ方が息子に似ていたり夜風に乾く鱈の開きの
初恋の人のイニシャル今はただ無色無臭の水素のH
軟膏を背中に塗ってくれる人いるかと聞かれる皮膚科の医師に

長崎 田中 光子
群馬 本川ミヤ子
岐阜 武藤 善尚

● 永田 和宏 選

百人が一年分の風つかみさねさし相模の大風揚がる
「母さんを大事にしろよ」と帰る息子が夫に告げおり部下のごとくに
ダンボールに仕切られし部屋の避難所にカーテン替りの浴衣吊らるる

神奈川 森島 君枝
愛知 青山 その
熊本 佐渡 京子

● 花山多佳子 選

甘やかで切ない風もあることを人工知能は知るのだろうか
セーターが猫の匂いに変わる頃洗濯をして桜見に行く
タテ十字ヨコ十行の電子手帳『大菩薩峠』いま読み終わる

神奈川 おのめぐみ
群馬 清水 静子
東京 日比 光哉

● 馬場あき子 選

海中の世界で皆に飛び魚が語り伝える風の体験
人参スープのひと匙ひと匙をよるこびて赤児は小さき舌をそよがす
兵士らを宙吊りにしてヘリが飛ぶ高江の森の平和が揺れる

東京 武藤 義哉
茨城 和田 智子
沖縄 平良 宗子

● 穂村 弘 選

風船が割れると知らぬ子はぎゅっと力任せに抱きしめている
遺影にと選り置きたるわが写真どこかに失せて死が遠ざかる
原爆の投下の前も投下後も街は決してモノクロではない

宮崎 兒玉 瑛子
山形 佐藤 洋子
愛知 澤村 陽子